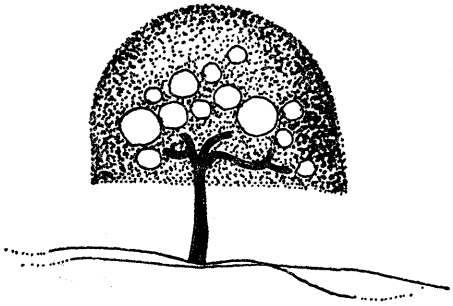
SF的読み解き
子どもという風景

第二十五回　異世界からの通信

堀内　守



「ホントは」

数々の「ホントは……」がやってきた。いずれも、一様な現われ方ではない。

夏空の星たちを眺めて、「金の砂」や「銀の砂」だと感じたり、天の川をミルクのようだと感じていたのに、それはまちがいなのだという。見かけなのだという。「ホントは……」と、その声はおごそかに告げる。「ホントは……」ずっと遠くにある巨大な星なのだ、と。あるいは、「砂どころか、地球ほどもある星なのだ」とか、「太陽よりも大きいのだ」と。

告げる方は親切に教えてくれたのであろう。だが、教わる方にとっては、「ホントは……」のもたらすものは親切さを通り越している。「まだ、見かけを信じているのか」というような、幼なさをあざ笑うようなときもあ

り、とっくにそんな段階を通り過ぎた自分へのいとおしみであったり、得意然とした口調のときもあった。

だが、「ホントは……」と告げてくれた人も、ホントはそうみごとに割り切っていたのだろうか。ホントは一方が他方を圧倒し去るようなものではなく、見かけを大らかに認めたり、「ホント」の世界を見近なところにまで翻訳するのに努力を必要としたのではないか。たとえば「太陽よりも大きいのだ」と説明してくれた人でも、そのことを体験の世界にまでもってくるにはかなり苦労したに違いないのである。

UFO

対流層も成層圏もつき抜けてやってくるというUFO。「未確認飛行物体」というのが「ホント」の名前だ。おかしな名前。名前はあるのに「体」はない。その名のイミは、「あれどなきがごとし」に近い。イメージとしては、お皿、ソーサー、お盆などのような形に擬せられている。写真も公開されている。けれども何であるのか、「未確認の物体」なのである。

「ユーホー」と呼ばれるに及んで、イミの方は消えた。本来の「未確認物体」の方のイミは軽くなり、「ユーホー」は、ヤッホーとばかり人びとの想像力を駆り立てはじめた。「空飛ぶ円盤」という表現は、このような現われだった。「未確認飛行物体」という名称は、「未確認」の方に重点を置いている。だが、「空飛ぶ円盤」の方は、「未確認」どころか、「見た、見た、こんな円盤型をしていた」と語っているのに近い。

UFOを「ユーホー」と言うだけで、何らのイメージも湧かないとしたら、「空飛ぶ円盤」などということばも生まれはしなかっただろう。

だが、いまや「ユーホー」ということばはちゃんと「空飛ぶ円盤」だと思われている。のみならず、写真を撮ったという人、「見た」と報告する人、しかも複数の人が同時に「見た」ことを証言したりする。目撃談は増える。

思弁的な推測や作り話が生まれたり、神話的な物語が

生まれたりする。つまり、知覚されたものが幻を生んだのか、それとも無意識のなかにあったものが、錯覚や幻になって生まれてきたのか。

「ホントは」どちらなのだろう。そして、「どちら」という言い方もおかしくて、「ホントは」いくつもの場合があるのかもしれない。

宇宙

前漢時代の淮南子（えなんじ）は、たくさんの著書を残した。そのうちのある部分は『淮南子』という本人の名前をもっている。同書の斉俗訓には、宇と宙についての解説があって、「宇」は天地四方をさし、宙は古往今来の意であると説かれている。簡単に言えば、「宇」は空間をさし、「宙」は時間をさしている。

この説明のしかたはやや抽象的だが、同書のなかには「宇」と「宙」に関して別の説明もある。こちらの方がずっと具体的だ。それによると、「宇」は天が覆うところのもので、「宙」は地の依るところだという。

これがなぜ具体的なのか。

踊りの振りつけであれ、遊戯の振りつけであれ、「天が覆うところのもの」を表現するには両手をできるだけ伸ばしてゆっくりと天空形に動かす所作をする。「地の依るところ」を表現するには、両足で地面をどしんと踏む所作となるだろう。これは万国共通である。いや、正確に言えば、どこの子どもたちでも同じような所作をもって応えるだろう。

相撲の仕切りの際の所作も、この伝でいけば、宇宙を表現したものということができる。

こんな面白い説明は、幼ないレベルの「ホントは……」では生じない。

空の星たちを眺めてあれこれ想像している段階をAとする。天文学の知識をもとに、概念をもって説明するやり方をBとする。そして、いまのように、しぐさで宇宙を表現する所作をCとしてみる。すると、Aに対してBを対置し、「ホントはAは見かけであって、ホントはBがホンモノなのだ」というのもどこか幼ないもののよう

に見えてくる。むしろCなども含み込んで考える「ホントは……」もなくては十全とはいえない。ある段階までは、AをBで克服したようなつもりになるのも悪くはない。だが、次の段階ではもういちど、Aを認め直す段階が必要だし、Cに目を向ける段階もなくてはどこかいびつになってしまう。

「宇宙」という概念は、これらのA、B、Cに応じて伸縮自在である。宇宙は「世間」をさす場合もある。天文学や宇宙科学のさす宇宙は限りなく広い。哲学の概念たる宇宙は、簡単にいえば、時間と空間のうちにある事物の全体をさす、というのが約束だ。しかし、すぐにAやCからギモンが出てくる。Aはいうだろう。「はて、時間と空間のうちにあるとはどういうこと？　全体ってどういうことかしら？」Cからも出る。「それは、要するに、いまのいま身も心も快調に動いているということの表現かもしれない」などと。そして、「みーんな、みーんな、あれも、これも、あれも、これも……みーんな。これが全体ということ」などと、からだで表現することであろう。

宇宙船

もはや「宇宙」は、普通名詞から脱しつつあるようである。「宇宙○○」は、もっと身近なものになっている。宇宙船、宇宙人、宇宙塵、宇宙線なども日常用いられるようになったし、宇宙船のイメージにもこと欠くことはない。宇宙戦艦ヤマトから、今日の宇宙刑事にいたるまで「宇宙○○」は、いつのまにか「宇宙のかなたからやってきて、ふだんはふつうの人と同じような生活をしているが、いざというときは変身をする」までに変わった。

鞍馬天狗、白馬の騎士、スーパーマン、ウルトラマン、宇宙刑事。一連の筋がたどれそうだし、その主人公の名前とともに育った子どもたちの風景も浮かびあがるだろう。

かなたの惑星の名前もさまざまである。ネフェロス星、オザゲン星、ボーサン星、ラーマ星、ケンタウルス

星、ピラス星、ドサディ星、オセアニア星、フォーマルハウト星、ラルフ星。その他もろもろ。しかし、「ホントは」ギリシア神話のなかに登場する神々の名前に近いものが多いし、なかには明らかにギリシア神話やローマ神話から採ったとおぼしきもの、ヒントを得てもじったとおぼしきものも少なくない。それくらいギリシア・ローマ神話は豊富なのである。

星の名、登場人物の名が星座や星雲の名とダブってしまうのもそのためである。

かなたより

「かなた」からやってくるものはいろいろである。予期せぬ時に不意にやってくるものがある。予告をしてやってくるものもある。期待しているときにやってくる者もある。いずれも何らかのメッセージをたずさえている。それでなければ物語ははじまらない。黒船であれ、風の又三郎であれ、サンタさんであれ、いろいろなメッセージをもってやってくる。攻撃者として、助っ人として、あるいは友として。それに応じて対応も変わる。反撃、降伏、共存、友交、交流、交換、混在、アマルガム。

同一のものが襲撃者として現われたのに、次の段階では馴致(じゅんち)されてしまい、さらに次の段階では友となり、助っ人になるというように変化することもある。例、ゴジラ。

長い時をかけて家畜化されていった動物のことをベースにしているのかと思ったら、さにあらずで、そんなに手がかかってはかなわないとばかりに、その辺の事情説明は省略されている。つまり、第二作あたりから、事情はさておき、かつての第一作のときのいかつい顔だちは何となく柔和になってしまっているのだ。あげくのはてには、第3作あたりまで連作がつくられて、最後には何とかして、そのものを消すために、「かなた」へ去っていくという別れの物語までつくり出される始末である。これらをたどってみると、「子ども」の人気者がいかに多様な変遷をたどるかよくわかる。いささかグロテスクな『E・T』が親しまれたのもこの変遷と合致した

からである。

さて、この「かなた」であるが、それは決して物語的な「かなた」に限られるものではない。「かなた」は象徴的であるから、この小さな部屋にいて、心は遠い世界へとさまよい出ることもある。今日のようにハイテクノロジーが出まわりはじめると、自閉的なまでになま身の自分は小さな空間やカプセルに閉じこもり、人間関係のわずらわしさから逃れて、心だけを「かなた」で遊ばせるということも機能的には可能になる。

説話

噂が人を呼ぶ。世間一般の風評がにぎにぎしく増殖する。ふつうの噂には尾ひれがついて、好奇心やセンセーショナリズムがそれをさらに煽る。異常な情緒もこれに加わる。

噂のタネはさしたることでもないのに、それが一挙に増幅し、ポテンシャルを高めて、国際問題にまで発展することも起こる。実に、人びとはいまや冗舌になったのだ。それとくらべると、カプセルに閉じこもろうとするのは、冗舌から逃れて、ひとりしみじみと自分と対話することに通じているのかもしれない。しかし、別の見方も可能だ。にぎやかにおしゃべりをしているのは、おしゃべりをしていないと不安だから、みんなでわいわい言い合っていて、何かの物の怪を見まいとしているようなものかもしれないし、自閉的に心を遊ばせている子どもは、老境を楽しんでいるのかもしれない、と。つまりは、転倒である。同様の現象である。あちこち利害のぶつかる人間関係のわずらわしさをさけて、利害を超越した境地とは、自閉的で、自己完結的ではなかったろうか。仙人、隠者、世捨人。みな「人里離れた」ところにささやかな「雨露をしのぐ」ための庵を建て、そこで達観であるか、世迷い言であるか、はなはだ超世俗的な生活をしていたものらしい。

墨絵の世界である。水墨画の世界である。直接それだと指摘はされていないが、映像の世界は水墨画に似ているところがある。生活の匂いがしないという点だ。

この場合の「匂い」も、意味は幾通りもあって、鼻で感受する匂いの段階もあるし、隠喩としての「匂い」もある。

万能の力をもった超人が、いざというときに悪を完全に消してみせるという説話は、子ども番組にはつきものであるが、この種の説話と並び、墨絵ぼかしの枯淡の世界がひそかに人気を呼んでいる。清らかな世界。だが、何となく、うさんくさい清らかさ。

カメラの目

カメラの普及によって、かつての墨絵の世界が修正され、別の枯淡の世界を創出したのだ、と考えてみよう。

微妙なところだが、どんな写真でも記録性をもっている。旅行記、日記、紀元文、メモ、備忘録等に代わって、カメラは微妙な一瞬までも記録にとどめる。カメラのトリックにより、新たに生み出される世界もある。合成写真、トリミング、モンタージュ。

枯淡の世界は純愛というテーマに簡単に転化してしまう。無邪気と未熟、無邪気と無欲、というような結びつきが主人公たちのパーソナリティやキャラクターを形づくっていて、状況の解き難さはテーマにはならなくなった。

カメラのスイッチを押したとたん、それは記録されたことを意味する。現像された写真は、一枚一枚が物語りを紡ぎ出しはじめる。

生まれた直後の顔、一ヵ月目の顔、一年目の顔、読みとり方によっては幾通りもの読み方ができる。そこに直接写されてはいない撮影者の「腕」の水準さえも。

カメラの目がこんなに一般的になったのはだれもがポーズを取るようになったことと関係があろう。その昔、まれにしか写真を撮ってもらえなかった世代の人びとはポーズということを知らなかった。だから、スナップ写真を知らない。それなのに、晴れて写真に写されるときにはシャッチョコばっている。ところが、ポーズを取るということは、シャッチョコばることをせず、ごく自然にふるまうということを意味する。つまりはカメラを意

識していないというふりをするということである。

加えて、できるだけうまく、理想像に近く撮ってもらうべくポーズを取る。

こうして、「はい、ポーズ」と「はい、チーズ」が接近する。

ファンタジー

自分の住んでいる町であれ、国であれ、未来はどうなっているか描いてみようと呼びかけてみる。子どもたちの描く未来図は、建物はビルのみであるし、交通の主力はロケットだったりする。まれに、田園風景が描かれることもある。

だが、ふしぎなことに、彼らの描く風景は、圧倒的に昼のものである。夜の風景ではない。夕方でも、朝でもない。まっ昼間。

未来は、さんさんと陽が当たっているものと思われているらしい。

しかし、宇宙への空想は想像以上に古い。神話のイカ

ロスは大空を翔んで太陽に挑戦したし、古代ギリシアの作家ルキアノスは、月を別世界に見たてて、月人を描写した。近代科学の成立以来、人間のこのような空想はにわかに具体性をもちはじめ、なかでも地球外の知的生命に対する可能性をさぐる試みは想像力を刺激した。文学や小説の世界ではこのテーマは火星人の侵略という形で始まったと考えることができる。

現代社会の悪夢が反映された未来もある。また文字どおり地上の束縛から解き放たれた未来もある。その広い世界においては、子どもがすでにいっぱしの主人公として大人顔負けの活躍をすることさえある。ここは未来への夢を十分にふくらますことのできる場であった。

だから宇宙探検、宇宙開発にとどまらず、惑星文明、銀河文明、宇宙論的考察……等々が途方もない規模で広がっていく。

だが——

子どもにもわかることは、人間が時間に拘束されて生きているということである。つねに「現在」に生きるほかしかない。しかも、その「現在」が変化していき、明日が今日になり、今日は昨日に姿を変えていく。時間を征服することは、人間の最大の夢であり、不死の願いはそのもっとも切実なあらわれであった。

いきなり不死へと飛ぶよりも、時を部分的にでも征服することはできないだろうか。これは人為的に時間のなかを駆けまわるという発想につながる。タイム・マシンがそれだ。

しかし、かりにタイム・マシンができたとしよう。そして過去へ出かけていって、過去を変えたら現在は存在することになるのだろうか？　ことによると、いくつかの現在がありうるのではないか。子どもにも人気があり、大人にも人気があるところのパラレル・ワールド（並行世界）はこのような可能性をさぐったものである。

そして、面白いことに、ここまでくると、ファンタジーは単なる夢であることをやめて、可能性の世界という確率論のような世界に私たちを誘っていく。そこには意外にも、人間の存在を再考させるようなテーマが並んで

いるのである。

たとえば、人の進化というような問題だ。

ありえたかもしれぬもうひとつの世界、もうひとつの歴史という観点から現在を見直してみることは、相対化をしてみるという行為である。人間の歴史も絶対的なものではない。

人間の歴史も、宇宙という大きな視野のなかでは、一つの不安定なものに過ぎなくなる。長いと思われるその歴史も、地球の誕生という観点から見れば、ほんの一瞬であるかのように見えてくる。

と同時に、そんなにちっぽけな存在なのに、ひとりひとりはかけがえのない存在であることもわかってこよう。

子ども——そうだ。小さいと思われていた子どもも、実は、新しい人間のよみがえりのテーマという新しいニュアンスをもってあらわれてくる。人類の運命をきめるのも、人が人になっていくのを手をかけて、目をかけて、その成長・発達に一喜一憂し、さまざまのわずらわしい関係のなかでどうやら自分というものをつくりあげ、他とのかかわりのなかで、ともにつくり、つくられるという関係を継続していくのが人間のようである。

高度に発達した生物であるようにも見えながら、また別の観点から見れば自尊心の強い、いがみ合いばかりしている不条理な存在でもある人間。そう見ることは、思いがけない世界を現出させる。その中途半端な存在がユーモアの契機となるということにほかならない。そこでは笑いも、悲しみも、ペシミズムまでがユーモアのなかにまとめあげられていき、「やっぱり子どもは人間の父だ」というような逆説がしみじみと本当だと思えてくることもある。

自由と不自由も、そのあたりで謙虚なまとまりを見せ、希望や夢をいつくしむ道に光を当ててくれることになることだろう。

（名古屋大学）